

二〇一四年度 卒業論文

禁廠

中世真宗における儀式・伝道について

—石山本願寺を中心に—

コピ

L110072

富島
智海

目次

序論	1
本論	2
第一章 中世末期の本願寺	3
第一節 本願寺の動向	3
第二節 社会的な背景	5
第三節 本願寺の特徴	7
第二章 儀式作法からみる本願寺	8
第一節 山科本願寺から石山本願寺へ	8
第二節 報恩講	10
第三節 親鸞三百回忌	15
第三章 本願寺と聖教	17
第一節 蓮如以前の書写・伝授	17
第二節 蓮如後の書写開版の動き	22
結論	24

禁 廠

註
参考文献

コピ—廠禁

序論

本願寺は聖教を中心とした教団である。その中世末期を対象とした研究は、歴史学的・考古学的視点からの研究が盛んであり、寺院史料、特に古文書などを中心としたものである。例えば、戦国大名と対峙してきた本願寺のすがた、特に織田信長との戦い、いわゆる石山合戦や各地で起こった一向一揆についての研究や、蓮如時代以来、寺基を転々としてきた本願寺のなかで山科や石山の封建制度や寺内町の伽藍・構造・遺跡などが注目された研究であるが、それらと聖教との関わりは論じられない。聖教を見る研究としての真宗学は蓮如研究の進展が主であり、時代としては『正信偈和讃』の刊行と儀式の改定や『御文章』を用いた伝道、「講」という組織についての研究、教義としては『御文章』の内容、『蓮如上人御一代記聞書』をはじめとするさまざまな言行録を使用した蓮如教学に関する解釈の研究である。それら蓮如に関する研究が大半を占めるなか、課題が残るのが、聖教、蓮如後の本願寺の動き、蓮如後の『御文章』の依用についてである。

本論文では、中世から近世に移行する時代の転換期である石山時代において、教団の基礎となり伝道にも基礎となる聖教、そして法要に際して大切な儀式作法がどのようなものだったのかについて、社会的背景、本願寺自体の動きのなかでどのような変化があったのかに焦点をあてたい。

第一章では、文明五年（一四七三）から天正一九年（一五九一）の歴史をまとめる。本願寺の権威・権力を、海外からの視点である宣教師の文、日本からの視点である大名の動向、内部からの視点である教団自体から見ることに加え、門跡勅許にも注目する。これにより、当時本願寺が変革期であったことを示す。第二章では、この

時代の本願寺の実態を見るために儀式作法に注目する。儀式作法をみるにあたって、浄土真宗においてもっとも大切な法要である報恩講、石山時代最大の法要といえる親鸞の三百回忌などに注目し、どのような法要形式だったのか、さまざまな事象に対して儀式作法がどのように変わったのかを、日記・言行録などから明らかにしていく。第三章では、変革する本願寺における伝道を明らかにするために、伝道の根底・土台である聖教を取り上げ、中でも聖教の書写、開版の動き、『御文章』の依用や引用などに着目する。中世末期の本願寺研究ではこれまで蓮如が主に研究されてきた。これらを検討することにより、蓮如が主に研究される中これまで不足していた、蓮如以降から近世に至るまで、特に石山時代の教団において、聖教の担った役割、本願寺のあり方や動きを明らかにしたい。

なお、「石山」という呼び方については、江戸時代に始まったものであり、中世後期の地名は「大坂」であったため、大坂本願寺の表現が正しいとの見解がある。本願寺の公式ホームページでは「大坂石山本願寺」⁽¹⁾、『増補改訂本願寺史』第一巻では「大坂本願寺」⁽²⁾、『宗報』では「石山本願寺」⁽³⁾との記載があり、本願寺で「石山本願寺史料展」も開催されているように、「大坂」「石山」について確実な呼称は決まっていない。本論文では比較的使用頻度の多い「石山」の呼称を基本的に使用することとしたい。

第一章 中世末期の本願寺

第一節 本願寺の動向

はじめに、中世末期の本願寺の動向を『増補改訂本願寺史』第一巻を参考にまとめておく。覺如以降、善如・緯如・巧如・存如と受け継がれてきた本願寺は、第八代蓮如宗主に至って大きな変革の時代を迎える事となった。蓮如は、文明五年（一四七三）に『正信偈和讃』を開版し、文明一五年（一四八三）に山科御坊が完成、明応五年（一四九六）に石山御坊が完成したが、その三年後、明応八年（一四九九）に蓮如は死去している。その後、本願寺宗主は実如が継職し、永正年間末期に蓮如の『御文章』から五帖八十通を選び出し、いわゆる『五帖御文章』にまとめている。その後、証如時代の天文元年（一五三二）、畿内天文一揆により山科本願寺が焼亡することとなり、やがて本願寺の寺基は石山御坊へと移されることとなる。また、その前後天文六年（一五三七）ごろに『御文章』が開版されたと考えられ、天文二〇年（一五五二）には『正信偈和讃』が再版された。その後、証如の体調が悪化するにあたり、天文二二年（一五五三）、十二歳の新発意をみずから得度させ、その顕如が継職することとなる。永禄二年（一五五九）に正親町天皇より門跡の勅許を受け門跡寺院に加わることになった。その他、永禄四年（一五六一）親鸞三百回忌が勤修されたことが、石山時代における大きな動向である。また、この時期に織田信長との石山合戦が開戦する。顕如は信長の上洛について美濃国郡上（現岐阜県郡上市）に宛てて次のような文書を送っている。

信長の上洛について、此方迷惑せしめ候。去々年以来、難題を懸けもうすについて、ずいぶんの扱いをなし、

彼方に応じ候といえども、その専なく、破却すべきよし、たしかに告げ来たり候。この上は力及ばず、しかればこのとき開山の一流、この時の退転なきよう、おのおの身命をかえりみず、忠節を抽んでらるべきこと有難く候。もし無沙汰の輩は、長く門徒たるべからざる候なり。しかして馳走頼入候。あなかしこ、あなかしこ。(4)

ここでは、織田信長が難題を申し付け、ついに石山本願寺を破却すると告げてきたという旨が記されている。このことから、天下布武をめざした織田信長の目に留まるほどの大勢力になっていたことがわかる。こうしてはじまった石山合戦は、開戦から十一年後に講和が結ばれ、頭如が石山本願寺から退去するという形で決着をみた。この頭如が石山本願寺を退去したということにより石山時代は終結する。その後、本願寺は紀州鷲森、和泉貝塚、大坂天満などを転々としたのち、豊臣秀吉により京都六条堀川の地を与えられ、江戸時代に移っていく。

さて、石山時代において、宗派として最も大きな転換点となったのが、門跡勅許である。本来、門跡号は皇室や摂関家の出身者が入寺した寺に贈られるものである。しかし、『増補改訂本願寺史』第一巻によると、本願寺は皇室や摂関家との血縁関係がなかった。なぜ正親町天皇は本願寺の申し出に応じ、門跡号を下賜することとなったのであろうか。これは、証如が九条家の猶子となっていたことで、摂関家に準じたものであると認められたからである。本願寺は九条家の猶子となつて門跡号を得たのはなぜか。これについてはいくつかの要因を考えることができる。第一に、これまでは天台宗、青蓮院の子院、つまり一つの末寺でしかなかった本願寺が、天台宗から独立し、青蓮院門跡に準じた地位になるためであったことが考えられる。第二に、門跡になることにより、浄

土真宗という宗派を朝廷から公的に認められるという効果があったのではないかと考えられる。第三に、日本の寺院のなかで門跡という地位が最も高い地位に位置しているため、一大教団となった本願寺にとって求めるべき地位だったということである。

さらに本願寺が門跡寺院に列せられたことにより、さまざまな変化があった。呼称の面ではこれまで宗主、上人、上様などとよばれてきたが、門跡寺院の主という意味で門主という呼び名が加わったことである。これについては、門跡勅許後に書かれた『宇野主水日記』のはじめに「門主へまいらせらる」⁽⁵⁾との記述があることから確認できる。さらに、制度の面では院家制度が始まったこと、衣体の面では紫衣・緋衣・裘代の公式着用が認められたことなどがあり、通仏教的色が強まったということが指摘できる。

第二節 社会的な背景

石山時代の本願寺は社会的にどういう存在だったのか。まず大名との関係について考察していく。越前の朝倉氏の娘が教如の正妻となる。加えて婚姻関係でいえば、近江六角氏の猶子となった三条家出身の如春尼が頭如の正妻となり、如春尼の姉を正妻にした甲斐の武田信玄と親戚関係になる。このように、いくつかの大名と親戚関係をもち、社会的権力を拡大していった。また、出雲尼子氏が証如に対し安芸攻めに際して加勢を頼むということが『天文日記』天文二一年（一五五二）九月二十五日の「從尼子民部少輔私へ、以書状安芸国可至手遣之間、彼国二此方門徒多之由候條、於尼子入国可令地層之趣、可加下知之由、申来候。」⁽⁶⁾より明らかになっている。

このことからわかるのは、各大名が本願寺と関係を築こうとし、その社会的影響や軍事力を利用しようとしたということがある。

また、当時の宣教師が本国に報告するためや布教をするために、日本のさまざまな情報が詳しく記された文書が残されている。そこで、宣教師の残した記録から、当時の本願寺に対する評価を確認したい。ジョン・フランシスコは天正八年（一五八〇）九月一日付の書簡に、

大坂の領主（顕如光佐）は日本にある最も有害な宗派の首領であり、己をデウスのように崇めさせているが、これは無償によるものではない。というのも、何びとも能う限り最良の進物を携えずに彼の前に現れることがないからである。悪魔が大いに彼を援助しているため、高貴な者も、そうでない者も皆ことごとく、彼を目にすると、顔を地につけて平伏して多くの涙を流すのは驚くべきことである。⁽⁷⁾

という文を残している。ここから宣教師にとって最も有害と言わしめる、宣教師を驚かせる宗教的影響力が本願寺にあったことがわかる。

このように、社会的影響力だけでなく、宗教的な力も非常に強大なものだったということがわかる。

さらに、教団としての本願寺はどうだったのか、本願寺内部の史料を確認したい。本願寺は蓮如以来、名号や絵像を各地に授与することにより、拠点ができ、教線が拡大していった。播磨を例とした名号・絵像授与の研究がこの分野で最新であり、これを参考に名号・絵像を授与された拠点について検討してみたい。⁽⁸⁾ 現在播磨に残っている方便法身像、親鸞影像是、実如と思われるものは十一点、証如と思われるものが七点、顕如と思われ

るもの二点である。播磨という国の中だけでも少なくとも二十箇所の拠点があったことが分かる。また『播磨と本願寺』によれば、これは二〇一四年段階でわかっているもののみであり、今後の調査で確実にふえるということである。また、峰岸純夫氏が図示した地図(9)によれば、天文期の摂津・河内・和泉の真宗寺院は三八箇所、道場は三七箇所あり、拠点は計七五箇所ということになる。

畿内の摂津・河内・和泉の三国で計七五箇所、畿内ではない播磨にも二十箇所以上の拠点があったことということから、その他の地域にもいくつかの拠点があつたことが予想され、蓮如以降の本願寺の教線の広がりは各地に拠点を作ることさらに強固となつていったのではないだろうか。

第三節 本願寺の特徴

次に、本論文で扱う石山時代における本願寺の特徴について述べておく。山科時代、石山時代の儀式作法などについて記されている、実悟の『山科御坊事并其時代事』、『本願寺作法次第』を参考にいくつかを見ていきたい。

これらの著作は実悟が石山時代に山科本願寺を懐かしみ、儀式作法などを述べたものである。『山科御坊事并其時代事』十四に「愚老若年のおり法慶坊の讃嘆には、御堂のうちには皆々感涙にむせび声をあげよろこばれ候。(中略) 当時はの信なきゆへ候か、感ぜられ候人の声もきこえず候。」(10)とあり、石山時代には、参集に信がなくなつていくということが嘆かれていくような状況にあつた。

『山科御坊事并其時代事』四十には、「此比は昔にかはり候は、御堂并茶所にて朝とくは、おさなき人々、若き坊

主達、数十人ならび居られ、経論聖教をよむ人おほく聞候つる。此比は一人もなく候。」⁽¹¹⁾とあり、『本願寺作法次第』九一⁽¹²⁾には、野村殿の御堂では、どんな時であれ、たくさんの人々が和讃・正信偈、経論聖教をよむ人が多かったが、今は全くないという旨が記されている。また『本願寺作法次第』一〇五⁽¹³⁾・一〇七⁽¹⁴⁾には『六要抄』、『本願寺作法次第』一〇六⁽¹⁵⁾には、『四帖疏』の具疏分を読む人がいないとの旨が記され、石山時代の現状を嘆いているのである。

また、『本願寺作法次第』一五八には、

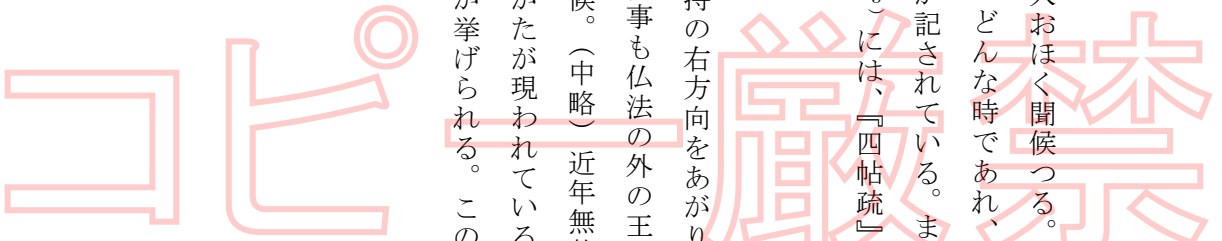
齋非時の時、御亭座敷は、むかしは御住持の右方向をあたりとせられて（中略）世間物の参られ候時、左の方あたりとさせられ候事勿論候。これは何事も仏法の外の王法世上の事は如此候間、左座を座上と、蓮―（如）上人の御時も、実如上人の御時も、如此候。（中略）近年無其儀候。⁽¹⁶⁾

とあり、中世に流行した王法仏法相依論のすがたが現われている。

石山時代の特徴としては以上のようなことが挙げられる。この石山においてどのような儀式・伝道が展開したのかについて、次章で述べていく。

第二章 儀式作法からみる本願寺

第一節 中世末期の儀式変化



中世末期の儀式の変遷を探る上で、大きな変化が三回あった。第一に、蓮如期に『正信偈和讃』が開版され、儀式に改変があったこと、第二に、実如期になった後に儀式の改変があったこと、第三に、証如・顕如期になってさらに改変があったことである。

第一に、蓮如期の改変についてである。『山科御坊事并其時代事』六〇には、「昔は六時礼讃を朝暮の勤行也、讃・念仏は近年の事也。讃・念仏は蓮―（如）聖人卅ばかりの御歳よりと聞え申候。」⁽¹⁷⁾とあり、「讃・念仏」が始まったことがわかる。

第二に、実如期の改変についてである。『山科御坊事并其時代事』四⁽¹⁸⁾に、蓮如の代から、蓮如往生の四、五年後まで早引は御影堂で行われていたが、その後、なぜか阿弥陀堂で行われるようになった、ということが書いてある。また『山科御坊事并其時代事』五に、「早引後の短念仏は、昔は五十返也、（中略）近年は実如御時より卅返に成候。」⁽¹⁹⁾とあり、早引後の短念仏が三十回になったこともわかる。

第三に、証如・顕如期の改変についてである。まず、灯明についてである。『本願寺作法次第』三七に「証如時代より毎朝灯明の参候は、尤の御事と申あひ候。」⁽²⁰⁾とあり、それまでは灯明をあげる日が決まっていたものを、証如期になって毎日あげるようになったということである。次に、正信偈くり引についてである。『本願寺作法次第』四九に、「代々御命日に正信偈くり引になり、讃之終ゆりのなく成候事は、証如の御時よりの事也。実如之御時までは、正信偈くり引にあらず」⁽²¹⁾とあり、証如期に正信偈くり引が始まったことが示されている。次に、代々御影についてである。『本願寺作法次第』四六に「代々御影を二幅にさせられ候事、証如前住御往生已後」

(22) とある。加えて、『本願寺作法次第』四人⁽²³⁾にも同内容の事が書いてあり、これまで代々の御影が一幅であったのに、頭如期に二幅になったとのことである。次に、和讃についてである。『山科御坊事并其時代事』八に、「和讃を念仏にくはへ申事の次第は口伝あり、九重にこれをさだむと也。当時はやうやう品は三重ばかりにて候。」⁽²⁴⁾ とある。このように、蓮如期に和讃が唱えられるようになって、そのころは九重だったものが石山時代には三重に減少したという変化があった。次に、衣体についてである。『山科御坊事并其時代事』十一に、「衣の色はうす墨にて、(中略)開山聖人の仰にて、蓮如上人の御時、実如上人の御時まで、うす墨にて侍りし。近代は末々のひとまで黒衣になり候」⁽²⁵⁾ とあり、『本願寺作法次第』九五⁽²⁶⁾にも同様の内容が記してある。これは衣体の色がうす墨から黒に変わったということである。次に、短念仏についてである。『山科御坊事并其時代事』十二に、「毎朝御影堂の勤の後短念仏百返、愚老若年の比中比までも、実如上人の御時は、長く御入候き。當時事の外に短くなり行き候。」⁽²⁷⁾ とあり、勤行後の短念仏が短くなったということがある。

これまで中世末期の儀式作法の改変を挙げてきた。蓮如期に改変されたものが儀式の中心として継承されていたであろうが、特に実如の山科時代から証如・頭如期の石山時代の改変が多くあった。これらには、実悟が石山時代の儀式作法に対する批判として簡略化していることを述べる文面が多い。石山時代になって儀式作法が簡略化したことは、蓮如期を知る実悟にとって嘆かわしい事態であったのだろう。

第二節 報恩講

次に、具体的な法要に際しての儀式作法についてである。

報恩講とは、浄土真宗の開祖、親鸞の祥月命日法要のことであり、「報恩講」と呼ばれるようになった由縁は覚如が永仁二年（一二九四）に撰述したとされる『報恩講私記』にある。また『増補改訂本願寺史』第一巻に「蓮如宗主以前の本願寺では、報恩講を大行事としては行っていないなかった。」⁽²⁸⁾とあるように、蓮如が報恩講を浄土真宗の中心法要と定めたとみられる。そして、蓮如上人の言行録のひとつである『空善聞書』には、「往古よりいまに一年もかけざる御勤行」⁽²⁹⁾とあり、どんな時であれ毎年必ず勤修されていた本願寺で最も重要な法要である。そこに儀式・儀礼の中心もあらわれることとなる。

ただ、覚如以来つねに報恩講と呼ばれ続けてきたというわけではない。『本福寺由来記』の応仁元年（一四六七）の文には「七昼夜ノ智恩報徳ノ御仏事ノ御ツトメ」⁽³⁰⁾とあるように、七昼夜のお勤めであったり、智恩報徳の御仏事と呼ばれていたりとさまざまに呼ばれていた。そこには報恩講と直接呼ぶだけでなく、具体的な法要の日程や内容を知りうる名で呼ばれていたのである。蓮如の時代になると、文明五年（一四七三）一月二一日付の帖外『御文章』で文献上で初めて親鸞の祥月命日法要が「報恩講」と記されている。その『御文章』は次の通りである。

抑今月廿八日は忝も聖人毎年の御正忌として（中略）この一七ヶ日のあひだの報恩講のうちにおいて、信不信の次第分別あらば、これまことに自行化他の道理なり。別しては聖人の御素懐にはふかくあひかなふべきものなり。⁽³¹⁾

一方で、報恩講として、あるいは親鸞の命日を機縁として、聖教が書写されている場合が多い。『浄土真宗聖典全書』第一・五巻の付録「書誌一覽」・『真宗史料集成』第二巻「現存目録」などには、次のようなものがみられた。

・『浄土三部経』 「正平六歳〔辛卯〕十一月廿八日（中略）釋存覚」(32)

・『教行信証』延書 「応永八曆十一月廿八日巧如」(33)

・『口伝鈔』 「天文廿二年十一月廿八日 积実悟書之」(34)

このように十一月二八日に書写されたものがあり、大遠忌ではなくても親鸞の命日は書写・伝授の契機となった。

次に、石山時代の報恩講についてである。宣教師ガスパー・ヴィレラの一五六一年八月一七日付書簡には次の文が残されている。

諸人の彼に与ふる金錢甚だ多く日本の富の大部分は此坊主（宗主）の所有なり。毎年甚だ盛んなる祭りを行ひ、参集する人々甚だ多く、寺に入らんとして門に待つ者、其の開くに及び競いて入らんが故に常に多数の死者を出す。而も此際死することを幸福と考え、故意に門内へ倒れ、多数の圧力に依りて死せんとする者あり。(35)

この文から、当時の報恩講の相当の盛況ぶりがみて取れる。「毎年甚だ盛んなる祭り」とは報恩講のことで、死者が出るほどの人参詣する人が多かったことがわかる。

では、報恩講の内容・次第はどうだったのだろうか。そこで、改悔批判に注目してみていく。『浄土真宗辞典』

によると、現在西本願寺で行われる改悔批判は、御正忌報恩講の時に、領解出言し、それに対し勸学が門主に変わって信心を勧めるという方法がとられる。改悔批判は蓮如期にはじまったとされるが、石山時代の状況はどうだろうか。

『山科御坊事并其時代事』二八、三一、『本願寺作法次第』五八を参考にすると山科時代から石山時代に移るにあたって改悔批判の方法が変わったようである。『山科御坊事并其時代事』二八に「五六〇、七八十人が多勢の分にて候間、坊主衆計一人づゝ改悔せられ、一心のとおり心しづかに被申」⁽³⁶⁾とあり、『山科御坊事并其時代事』三一に、

此近年天文以來、まいり候て、報恩講にあひたてまつり難有候。聴聞申候に、讚嘆はじまり、改悔五人三人被申敷とおもへば、兎角して一度に五十人百人大声をあげてよばゝりあげて被申時は、興ざめてきもゝつづれ、たふとげもなく候。⁽³⁷⁾

とある。これは、山科時代は堂内で一人ずつ肅々と行われ、出言者は五十から八十人で心静かに聞くことができず、石山時代には一度に五十から百人が大声で叫び、実悟が興ざめするといった状況であったことを示している。なぜこのように変化したのだろうか。青木忠夫氏は、

天文元（一五三二）年山科本願寺が天文法華の乱で焼かれたので、翌二年石山の坊舎を本寺と定めた。以来同十一年までは阿弥陀堂・御影堂併用の時代であった。が、同年十一月十九日に完成の阿弥陀堂へ新造の本尊が安置され、一方、旧来の御堂には翌廿日親鸞影像が新厨子へ移されて御影堂となった。翌十二年八月二

日御影堂内陣が狭小なため、半間西へ広げられた。かくて、両堂が並立してその機能を發揮することになった。報恩講参詣人の収容力が更に拡大したに違いない。(中略)したがって、報恩講次第にも改変が加えられたと考えられる。(38)

と述べている。これは改悔に関する論文であるが、次第の改変については改悔批判にも当てはまることと考える。新たな形式でこの年の報恩講が勤められることになったのである。

これについて検証すると、『蓮如上人余芳』には山科御坊の御影堂は間口一一間、奥行一二間の大きさであるとする。(39)これは非常に大きい造りである。山科から石山に移るときに変化があったということは、青木忠夫氏に従えば、御影堂の大きさに変化があるということになる。石山の御影堂の大きさについて、大阪歴史博物館の縮尺二五分の一の復元模型を基に見てみる。模型を見る限り、間口の大きさは縁側も含めて一五間程度、奥行が後堂・縁側を含めて十六間程度である。(40)また青木忠雄氏の論の中に、『天文日記』の天文一二年八月二日の箇所「御影堂内陣狭少之間、自今日西へ間中所仕出之」(41)という御影堂を拡張したとの記載があるが、この模型は頭如期、永禄四(一五六一)年の親鸞三百回忌時の御影堂を復元したものであり、拡張された後のものとなっている。これらを見る限り山科と石山とは明らかに石山が大きくなっている。寺基の移転にもなつて報恩講の規模が拡大し、それに伴つて次第も変化していったと想定される。加えて、御堂の大きさに関して、『吉崎御坊の歴史』によると、吉崎の坊舎は間口五間、奥行十一間二尺であり(42)、寺基移転ごとに規模が大きくなつていくことがわかる。

これまで、法要としての報恩講は毎年勤修され盛況だったが、山科から石山に移るときに報恩講次第、方法に変化があったということ述べてきた。本願寺において最大の行事となっていた報恩講だが、その中で特に注目されるのが三百回の大遠忌である。

第三節 親鸞三百回忌

親鸞三百回忌は永禄四年（一五六一）、石山本願寺で勤修された。永禄二年（一五五九）に門跡に列せられた後の初めての大きな法要である。そこには門跡成の影響があったと考えられ、具体的な内容の変化が多くみられることが特徴である。その変化について、『今古独語』を中心に見ていきたい。『今古独語』とは、蓮如の四男蓮誓の九子である顕誓が永禄一〇（一五六七）年に著したものであり、親鸞三百回忌について詳細な記述がある。

変化の一つめは衣体である。これまでは、『私心記』を見る限り、裳付衣、紫袈裟が通常であった。一方で、『今古独語』には、

御仏事の儀式、当分御門跡になし申され候と申し、院家各々出頭、ことさら御年忌懈拷近の御事なれば、他宗の衆参詣もあるべし、先聖道の衣装しかるべき由にて、法服・納袈裟用意あり、青蓮院門跡ノ出世松泉院法印ニ御談合（⁴³）

と、それまで着用のなかった七条袈裟が用意されたことが記されている。これは文中にもあるように門跡格を反映した衣体であり、他宗からは南禅寺らが参詣したことが明らかになっている。金欄の七条袈裟を内陣出勤者全

員が着ていたということからも、壮麗な儀式だったことが推測される。

変化の二つめは作法である。親鸞三百回忌の作法について、『今古独語』に次のようにある。

法事の作法は、日中「三部経」を一巻づゝ伽陀あり。読誦の後、まづ導師礼盤に向ひ三礼、其後「十四偈」始め行道、次に漢音の『阿弥陀経』、念仏回向なり。(44)

この文の中で注目すべきは、行道である。この親鸞三百回忌において初めて行道作法が行われたのである。行道作法とはどのようなものだろうか。『仏教音楽辞典』には「本尊または堂塔の周囲を右回りに巡る作法。(中略)行道中、誦経したり、声明を唱えることが多く、散華を行うこともあるが、無言行道と称して黙って行道する場合もある」(45)とある。その行道作法の中で親鸞三百回忌に行われた行道について『今古独語』に「十四行偈」を始め行道」(46)と記述がある。「十四行偈」とは、善導『観経四帖疏』のうち「玄義分」の冒頭にある「道俗時衆等」(47)からはじまる偈文、「帰三宝偈」のことで、現在浄土真宗では葬儀勤行の中の出棺勤行で読誦される。この「十四行偈」をはじめから内陣を歩いたというのである。しかしながら、『今古独語』には「翌年は報恩講行道これなし、衣裳は去年の如し。勤行は例年にかはらず」(48)とあり、次の年の報恩講の衣体・勤行は三百回忌のままだったものの、行道作法がおこなわれなかったことが記されている。つまりこの作法が大遠忌に特別なものだったことが分かる。

このように毎年勤修されてきた報恩講の流れのなかで、一層重視され特別に営まれたすがたが三百回忌に見ることが出来る。さまざまな変化が表面的にあらわれ、天台宗などの法要の要素もふんだんに取り込まれた法要で

あった。

これまで石山時代の儀式について述べてきた。主な特徴としては一つめに通仏教諸宗の作法などが取り込まれたことである。これは現在でも残っているものがあり、現在の法要形式の基礎になっているといつてよいのではないだろうか。二つめに儀式の簡略化があげられる。

第三章 本願寺と聖教

第一節 蓮如以前の書写・伝授

中世における伝道方法として、聖教を書写し、伝授するという方法がある。石山時代の伝道を見るにあたって、まず蓮如以前の聖教書写・伝授についておさえておきたい。

具体的に誰がどの聖教を著し、書写したのかを明らかにするために次の表を作成した。この表は『真宗史料集成』一卷「現存聖教目録」の筆者の部分に記載されている著作・書写本を抜きだしたもの、また『本願寺年表』をもとに書写、著作を抜き出し、さらに他者に伝授した場合などそれに準ずるものを合わせたものである。縦は主な著者・部類に分け、横は本願寺歴代宗主である。また多くの著作を残し、後の蓮如に多くの影響を与えた存覚も加えている。

禁本一廠

存如	巧如	綽如	善如	存覚	覚如	
『安心決定鈔』『教化集』『親鸞聖人御因縁秘伝鈔』『阿弥陀経』				『観無量経集註』『往生要集』『阿弥陀経集註』『選択集』『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』『末法灯明記』『看病用心鈔』『慕帰絵詞』『肝要記』	『自力他力事』『法然上人法語』	經典・浄土教
『愚禿鈔』『三帖和讃』『教行信証』『正信偈文』	『教行信証』延書 『教行信証』		『教行信証』延書	『教行信証』『愚禿鈔』『教行信証』延書	『太子和讃』『愚禿鈔』『経釈要文(二尊大悲本懷)』『浄土文類聚鈔』『上宮太子御記』『皇太子聖徳奉讃』『尊師和讃鈔』	親鸞
『御伝鈔』『親鸞伝絵』	『改邪鈔』	『口伝鈔』	『親鸞伝絵』	『口伝鈔』『本願鈔』	『口伝鈔』『報恩講私記』『親鸞伝絵』『拾遺古徳伝』『執持鈔』『教行信証大意』『本願鈔』『改邪鈔』『願願鈔』『最要鈔』『啓白文』	覚如
『法華問答』『浄土真要鈔』『諸神本懐集』『持名鈔』『破邪頭正鈔』			『存覚法語』	『浄土真要鈔』『諸神本懐集』『持名鈔』『破邪頭正鈔』『女人往生問書』『頭名鈔』『步船鈔』『決智鈔』『報恩記』『選択註解鈔』『至道鈔』『法華問答』『存覚法語』『歎徳文』『六要鈔』『浄典目録』『纒解記』『存覚上人袖日記』『信貴鎮守講式』		存覚
						蓮如

蓮如	『後世物語』『安心決定鈔』『還相回向聞書』『往生要集』『慕婦絵詞』『歎異抄』『法然上人御詞』『一年二季彼岸事』	『浄土文類聚鈔』『三帖和讃』『愚禿鈔』『末灯鈔』『教行信証』『教行信証』延書、『愚禿悲嘆述懷和讃』『入出二門偈頌』『三経往生文類』	『口伝鈔』『他力信心聞書』『御伝鈔』『女人往生聞書』『最要鈔』『報恩講私記』『教行信証大意』『改邪鈔』『願願鈔』『親鸞伝絵』	『浄土真要鈔』『持名鈔』『歎徳文』『浄土見聞集』	『正信偈』 大意 『御文章』 『御俗姓』
----	---	---	--	--------------------------	-------------------------------

この表から親鸞以降主な著作は覚如と存覚に集中しており、その後善如・綽如・巧如・存如には主な著作がないことがわかる。加えて特に存如と蓮如には書写が多いこともわかる。

さらに、『本願寺史』の文を見てみたい。『増補改訂本願寺史』第一巻に、

注目すべきは『正信偈』と『三帖和讃』である。これ以前、覚如宗主や存覚、あるいは乗専などがこれらを書写した遺品は現存せず、続く善如・綽如・巧如の各宗主も同様である。初期の本願寺では、これらはほとんど重視されなかったようである。(49)

とある。確かに現存物、『本願寺年表』に記載されているものの中には覚如以来、存覚、善如、綽如、巧如による『正信偈』『三帖和讃』の書写がなく存如が初めて書写しているのは事実である。右の『増補改訂本願寺史』第一巻にある文から読み取れば存如までの宗主は『正信偈』『三帖和讃』を書写していないわけであるが、本当に軽視されていたのだろうか。

まず、存覚・善如・巧如・存如・蓮如には『教行信証』そのものの書写がある。また、それぞれの著作にはた

くさんの真宗聖教が引かれている。そこで『正信偈』『三帖和讃』の立ち位置について、覚如・存覚の引用などから見ていく。

はじめに『正信偈』についてである。存覚は、『六要鈔』で『正信偈』そのものを註釈し、それをもとに蓮如は漢文体の『正信偈註』、『正信偈註釈』を著し、さらに和語にして『正信偈大意』を作成している。また、先に述べたように『正信偈和讃』として刊行もしている。また、『正信偈』各部の受容がある。次の表は『真宗史料集成』第一巻に収録されている聖教の中の親鸞以降より存如期に至るまでの著作で『正信偈』が受容されている箇所をまとめたものである。

『口伝鈔』(二)	<p>「已能雖破無明闇と等のたまへり」(六三三頁) 「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩と」(六四七頁)</p>
『改邪鈔』(一)	<p>「能発一念喜愛心」とも、「不断煩惱得涅槃」とも」(六六六頁)</p>
『浄土真要鈔』(三)	<p>「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味」といへり、(六七八頁) 「撰取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真信心天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇」といへり、(六七九頁) 「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」といへり。(六八四頁)</p>
『持名鈔』(一)	<p>「よく一念喜愛の心を発せば、煩惱を断ぜずして涅槃を得」と釈したまへり」(七二二頁)</p>
『存覚袖日記』(六)	<p>如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時郡生海 応信如来如実言(八八三頁)(八八五頁) 本願名号正定業 从即横超截五惡趣の二〇句(八九〇頁)(八九二頁) 如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時郡生海 応信如来如実言とみられる文(八八七頁) 如来所以興出世 唯説弥陀本願海とみられる文(八九三頁)</p>

計十四箇所の書写・引用があるが、この表では「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」の四句と、「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」の部分が特に多く引かれていることが注目すべき点である。覚如・存覚教学の特色として、信心正因称名報恩、または信心正因を特に押し出したということが引用からあらわれている。これは親鸞が『尊号真像銘文』に詳しく解説されている文⁽⁵⁰⁾でもある。確かに親鸞の教義を受け継いでいるのである。

次が同様に『三帖和讃』が引用されているところを調べた表である。

『歎異抄』(一)	高僧和讃・七七(五〇八頁)
『執持鈔』(一)	正像末和讃・一一六(六二七頁)
『女人往生聞書』(三)	浄土和讃・六〇(七二八頁)、高僧和讃・六四(七二八頁)、「和讃」という言葉(七三八頁)
『浄土見聞集』(一)	「浄土和讃」「正像末和讃」という言葉(八五四頁)

『三帖和讃』に関しても六回の引用がある。このように決して多くはないが存如期に至るまでも、『正信偈』『三帖和讃』ともに引用されている。公刊などの例から、文献の上では、存如がはじめて『三帖和讃』を重視したということができるかもしれないが、引用を見る限り『三帖和讃』は代々伝授されてきたものであるということができる。『教行信証』、ひいては真宗教義の肝要としての『正信偈』と和語の『教行信証』とも呼ばれ真宗教義を「ホメヤワラゲ」た『三帖和讃』は、決して軽視されていたわけではなく、たしかに伝授・相伝されてきたということをもふまえ、蓮如後の聖教の扱いに移る。

第二節 蓮如後の書写・開版の動き

本願寺での聖教開版は蓮如より始まる。またその後の動きについて『本願寺史』第二巻に次のように述べてある。

本願寺の聖教開版は、蓮如宗主の文明版『正信偈和讃』に始まり、次いで天文年間重版されたが、教如宗主は慶長四年霜月またこれを刊行している。『御文章』（五帖八十通）も天文年間証如宗主によって初めて板行された。その後江戸時代には、右の二書を開版することは、歴代に例が多い。(51)

これをふまえて、具体的に書写・開版等、そして『御文章』等について列挙し、その傾向を検証していく。

まず、書写についてである。実如から顕如の現存する書写本を『真宗史料集成』第一巻「現存聖教目録」から抜き出すと、実如は『歎徳文』・『破邪顕正鈔』・『報恩講私記』を書写している。証如は、『顕名鈔』・『歩船鈔』、顕如は現存なしとなっている。『本願寺年表』には、実如・証如・顕如の書写に関する記述がなかったため、現存本から判断すると、三宗主とも書写がそれほど多くないということとなる。存如から蓮如にかけて書写が多くなされてきたにも関わらず、なぜ実如・証如・顕如期に至って減っているのだろうか。その理由は、必要な本は存如・蓮如期に多く書写されていることもあり、それらが本願寺本として所蔵され伝えられたことが考えられる。次に、『御文章』についてである。蓮如の『御文章』が実如により五帖八十通にまとめられたことは第一章でふれた。蓮如後、この『御文章』の扱いはどうなったのだろうか。

はじめに現存『御文章』を確認しておく。『真宗史料集成』第一巻「現存聖教目録」には御文章が明記されてい

ないため、『真宗典籍刊行史稿』によった結果、証如は五帖開版本と証判本三五本、顕如は五帖開版本と、証判本三四本が残っている。また実如は『真宗典籍刊行史稿』に記載されていないものの、『宗報』二〇一三年九月号によれば証如、顕如より証判本が多かったということが明らかになっている。これまで示してきた聖教類によれば、覚如、存如は書写に加え自らの著作が多く、蓮如までは、親鸞また覚如、存覚の著作を書写するということが中心であった。

しかし、現存の証判『御文章』の収録を見る限り、各宗主は蓮如の書いた数百通の『御文章』の中から数通を選び、証判をして送るという方法で伝道を図っていた。蓮如後実如・証如・顕如期には覚如・存覚による著作の書写というよりも蓮如が開版した『正信偈和讃』に加え、蓮如が著述した『御文章』をさまざまな場所に伝授するという傾向があるのである。とくに蓮如までにはない平易な文章が使われた『御文章』を聖教化し、その『御文章』で、開版された『正信偈和讃』、またその他聖教のこころをよむというような新しい方法を使った伝道が中心となっているのである。その特性は、蓮如が各地に送った御文章を集成して、単帖または五帖にしてまとめることであった。

次に開版の動きに注目して聖教の書写と伝授について考察したい。現存刊本を『真宗史料集成』第一巻「現存聖教目録」をもとに抜き出すと、蓮如期である文明五年（一四七三）に『正信偈並三帖和讃』『正信偈和讃』が開版され、証如期である天文二〇年（一五五一）、天文二二年（一五五三）に相次いで『正信偈並三帖和讃』が開版されている。また、開版年は未詳であるが室町時代末期とわかる『正信偈並三帖和讃』の覆刻版、改訂版、模刻

本らが数点ある。

蓮如期に開版されたものが、石山時代、証如期にたびたび再版され、室町時代末期の開版もおそらく証如期のものが少なからずあると推測すれば、このころは、伝道においての聖教は『正信偈並三帖和讃』が中心聖教であったと言っているのではないだろうか。各地への伝道において教団が小さかった蓮如までの時代は僧侶の研究として漢文体の著作の書写が多く、一般の人々、地方の道場には書写され各地方に伝授された著作を読んだ僧侶からの口伝による伝道が主であったが、教団が大規模化し日本随一の宗派となつてからは、もちろん今までの方法も続けられたが、中心としては、要旨がまとめられた『正信偈』、簡単な和文体である『三帖和讃』をそのまま開版し、送ることを通じて広がることになつたのではないだろうか。事実、江戸時代には、正信偈や和讃を抜き出してそのものの講録も作成されるようになるのである。広がった『正信偈和讃』を、儀式用として使用し、教化するようになったことも伝道における特徴として挙げられる。

結論

これまでで石山の歴史、その時代の儀式作法と聖教について述べてきた。

儀式作法の面では、報恩講と親鸞三百回忌に注目し、山科から石山に寺基が移転するにあたってさまざまな変化があった。特に報恩講では改悔批判など次第の変化があったことがわかった。親鸞三百回忌は門跡寺院になつ

た影響が多に出た法要であり、具体的には衣体の変化、行道などの変化が現れたことが確認できた。これらの変化は、現在まで黒衣・七条袈裟や、『正信偈和讃』の中での三重の念仏和讃など、現代に受け継がれている。現在の儀式作法の始まりとなったものに石山時代のものが多いのである。

伝道の面では、聖教の書写伝授、中心聖教となった『正信偈』『三帖和讃』『御文章』に注目し、石山本願寺の前時代と比較しつつみてきた。その結果、『正信偈』『三帖和讃』は、実際にはしつかり相伝され続けてきたこと、蓮如の『御文章』を聖教の位置におしあげ、その新しい伝道方法を中心として、各地へ伝道を行っていたことがわかった。主に石山時代では聖教開版が行われたことが注目すべき点である。『正信偈並三帖和讃』『御文章』を聖教化して伝道し、様々な人々の手にそれが渡った。一方で実態としては門跡勅許、また各地大名との関係などがあつた。その中で、教団としての規模拡大が続き、それに対応する形で儀式作法も変化していったと考えられる。

最後になるが、儀式作法の面では、なぜ変化があつたのかを文書の内容に踏み込んで検討できず、聖教の書写・伝授の面では誰の所望でしたのかということまで検討しえなかった。またこの石山時代から近世・江戸時代にかけての伝授、変化も含めて再考の余地があることを今後の課題としたい。

- (1) <http://www.hongwanji.or.jp/hongwanji/history.html>
- (2) 『増補改訂本願寺史』第一巻、本願寺出版社、二〇一〇年、五二九頁
- (3) 『宗報』本願寺出版社、二〇一三年九月号、四頁
- (4) 『大系真宗史料』文書記録編一二、石山合戦、法蔵館、二〇一〇年、五頁
- (5) 『石山本願寺日記』下巻、清文堂出版、一九三〇年、四九四頁
- (6) 『石山本願寺日記』上巻、清文堂出版、一九三〇年、六六七頁
- (7) 木越樹『キリシタンが見た真宗』、真宗大谷派宗務所出版部、一九九八年、三二頁
 (原典：『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第III期五巻、同朋舎、一九九二年、二七七・二七八頁)
- (8) 『播磨と本願寺―親鸞・蓮如と念仏の世界―』特別展播磨と本願寺展実行委員会、二〇一四年、一二四頁
- (9) 峰岸純夫「大名領国と本願寺教団―とくに畿内を中心に―」『戦国大名論集』一三、本願寺・一向一揆の研究
 一九八四年、二七頁
- (10) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、本願寺出版社、二〇一四年、九三六頁
- (11) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九四四頁
- (12) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九九一頁
- (13) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九九五頁
- (14) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九九五頁
- (15) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九九五頁
- (16) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、一〇〇八頁
- (17) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九五〇頁
- (18) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九三三頁
- (19) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九三三・九四四頁
- (20) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九七七頁

禁

- (21) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九八〇頁
- (22) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九八〇頁
- (23) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九八〇頁
- (24) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九三四頁
- (25) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九三五頁
- (26) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九九二頁
- (27) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九三五頁
- (28) 『増補改訂本願寺史』第一卷、四六七頁
- (29) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、六五四頁
- (30) 『大系真宗史料』文書記録編三、戦国教団、法蔵館、二〇一四年、一三六頁
- (31) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、二七六頁
- (32) 『浄土真宗聖典全書』一、三経七祖篇、本願寺出版社、二〇一三年、付録一三頁
- (33) 『真宗史料集成』第一卷、親鸞と初期教団、同朋舎、一九七四年、一〇四六頁
- (34) 『真宗史料集成』第一卷、親鸞と初期教団、一一〇二頁
- (35) 『キリシタンが見た真宗』三〇頁
- (原典) 『耶蘇会士日本通信』上巻、雄松堂書店、一九六六年、四二・四三頁)
- (36) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九四〇頁
- (37) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、九四一頁
- (38) 青木忠夫「戦国期本願寺報恩講の「改悔」に関する一考察」『仏教史学研究』三七(一)一九九四年、八二・八三頁
- (39) 『蓮如上人余芳』本願寺出版社、一九九八年、八一頁
- (40) 『大阪歴史博物館常設展示案内』大阪歴史博物館、二〇〇二年、三九頁
- (41) 『石山本願寺日記』上巻、四五四頁

禁 廠

- (42) 『朝倉喜祐『吉崎御坊の歴史』』国書刊行会、一九九五年、五九頁
- (43) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、一一八四頁
- (44) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、一一八四頁
- (45) 『仏教音楽辞典』法蔵館、一九九五年、五九頁
- (46) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、一一八四頁
- (47) 『真宗聖教全書』一、三経七祖部、大八木興文堂、一九四二年、四四一頁
- (48) 『浄土真宗聖典全書』五、相伝篇、一一八六頁
- (49) 『増補改訂本願寺史』第一卷、三九二・三九三頁
- (50) 『浄土真宗聖典全書』二、宗祖篇上、本願寺出版社、二〇一一年、六五一・六五二頁
- (51) 『本願寺史』第二卷、浄土真宗本願寺派、一九六九年、四一六頁

参考文献

資料

- 『浄土真宗聖典註釈版・第二版』本願寺出版社、二〇〇四年
- 『浄土真宗聖典全書』一、三経七祖篇、本願寺出版社、二〇一三年
- 『浄土真宗聖典全書』二、宗祖篇上、本願寺出版社、二〇一一年
- 『浄土真宗聖典全書』五、相伝編、本願寺出版社、二〇一四年
- 『真宗聖教全書』一、三経七祖部、大八木興文堂、一九四一年
- 『増補改訂本願寺史』第一卷、本願寺出版社、二〇一〇年
- 『本願寺史』第二卷、浄土真宗本願寺派、一九六九年
- 『本願寺年表』浄土真宗本願寺派、一九八一年
- 『石山本願寺日記』上卷、清文堂出版、一九三〇年

- 『石山本願寺日記』下巻、清文堂出版、一九三〇年
『大系真宗史料』文書記録編一二、石山合戦法蔵館、二〇一〇年
『大系真宗史料』文書記録編三、戦国教団法蔵館、二〇一四年
石田充之、千葉乗隆『真宗史料集成』第一巻、親鸞と初期教団、同朋舎、一九七四年
『新修大阪市史』第二巻、大阪市、一九八八年
『仏教音楽辞典』法蔵館、一九九五年
『日本国語大辞典第二版』第七巻、小学館、二〇〇一年
佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』伝久寺、一九七三年
『国史大辞典』第十三巻、吉川弘文館、一九九二年

書籍

- 『蓮如上人余芳』本願寺出版社、一九九〇年
『頭如上人余芳』本願寺出版社、一九九八年
『宗報』本願寺出版社、二〇一三年九月号
『播磨と本願寺―親鸞・蓮如と念仏の世界―』特別展播磨と本願寺展実行委員会、二〇一四年
木越樹『キリシタンが見た真宗』真宗大谷派宗務所出版部、一九九八年
『日本歴史』第八巻、岩波書店、二〇一四年
朝倉喜祐『吉崎御坊の歴史』国書刊行会、一九九五年
『大阪歴史博物館常設展示案内』大阪歴史博物館、二〇〇二年
『龍谷大学善本叢書二一、三帖和讃』同朋舎、二〇〇一年

論文

禁蔵

二七

安藤弥 「戦国期真宗僧の歴史認識」 『山科御坊事并其時代事』から『本願寺作法次第』へ——『真宗研究』五、二〇〇八年

安藤弥 「戦国期本願寺「報恩講」をめぐって——「門跡成」前後の「教団」——『真宗研究』四六、二〇〇二年
青木忠夫 「戦国期本願寺報恩講の「改悔」に関する一考察」 『仏教史学研究』三七（一）、一九九四年
峰岸純夫 「大名領国と本願寺教団——とくに畿内を中心に——」 『戦国大名論集』一三、本願寺・一向一揆の研究、一九八四年

禁蔵

コピ